

吉野川歴史探訪 吉野川利水列伝 その2

～新田開発 町民たちによる大型プロジェクト～

新年、明けましておめでとうございます。別宮川三郎です。新年早々、積雪による大渋滞、鶏インフルエンザなど大変な状況になりました。穏やかな年になれば良いのですが。

さて、明治以前の吉野川の水利利用は、沿岸の耕地が比較的高く、直接吉野川からの取水が難しかったことに加えて、洪水による氾濫により稲作よりも藍栽培が盛んだったことから、藩政期に吉野川の水を農業用水として利用していたのは、吉野川（現在の旧吉野川）最下流の新田開発地帯でした。今月号では、吉野川利水列伝その2として、吉野川下流の海に近い低湿地で本格的に始まった新田開発について探訪したいと思います。

1. 新田開発の歩み

吉野川の海に近い低湿地は、藩政期の開発によって形成された地域なのです。吉野川の南岸から吉野川橋を渡って鳴門市大麻町立道に至るかつての淡路街道を境にして、西側の土地はやや高く、中世の頃、勝瑞の城下町が繁栄したところでした。一方、東側一帯の低湿地は藩政期になってから開拓したところなのです。ちなみに北島町の江尻という地名は、むかし今切川の川尻だったところなのです。

新田開発の「新田」とは、本田とか古田に対する徳川時代の概念で、藩政期の本田は、徳島藩領主が行った総検地のときに石高をつけられた田畑、屋敷などをいい、それ以後に新しく開発された田畑を「新田」と呼びました。また、新開の土地は、「村」と言わず「新田」と呼びました。

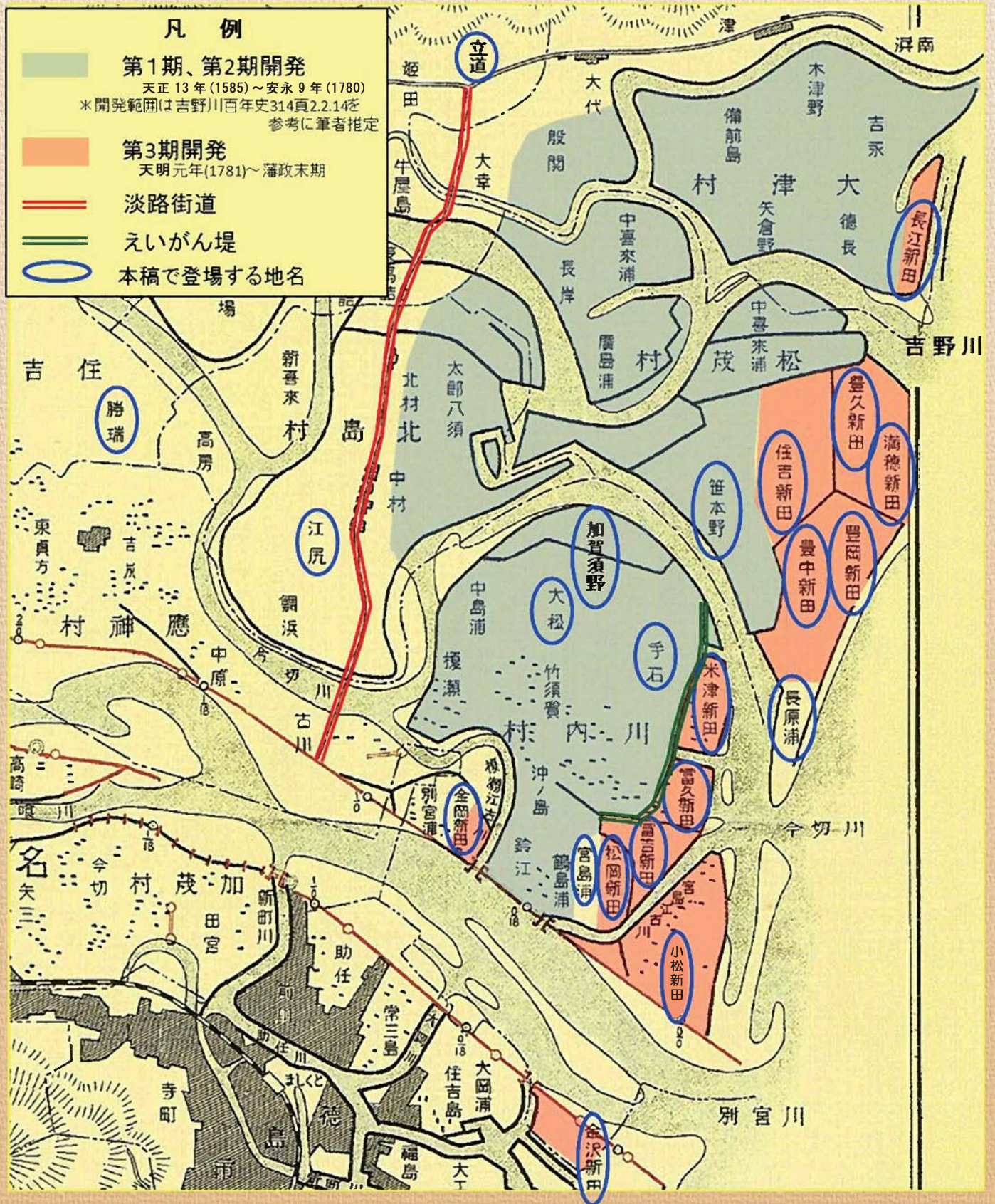
藩政期の新田開発は3期に分類されます。第1期は、天正13年(1585)の蜂須賀入国から万治3年(1660)までの75年間で徳島市川内町の大松、平石、加賀須野は、京都の商人である三島泉齋が藩の許可を得て開発したもので徳島の新田開発史上最大の規模でした。次いで、万治3年から安永9年(1780)までの120年が第2期で、第1期の新田を中心に拡げ成長させた時代で、徳島市川内町付近は元禄時代に急成長した地域でした。第3期は天明元年(1781)から藩政末期までで、この頃の新田開発は海に向かって発展していきましたが、この時代の商人の経済力は藩財政を左右するほど成長し、新田の事業主は町人が多くなりました。(図-1 参照)

正保2年(1645)の石高は18万7千石、村数は417村でしたが、藩政期初期の新田開発により、元禄10年(1697)の石高は19万4千石、村数は453村になりました。約半世紀の間に、石高7千石の増収、村数は38村増加しました。

新田名	明治22年の村名	初期開発者	開発開始年
住吉新田	板野郡松茂村	伊澤亀三郎他	天明3年 1783
米津新田	板野郡川内村	寒川恵惣次	天明4年 1784
松岡新田	板野郡川内村	寒川道之丈	寛政年間 1789
富吉新田	板野郡川内村	寒川恵惣次	寛政4年 1792
富久新田	板野郡川内村	寒川恵惣次	寛政4年 1792
長江新田	板野郡大津村	阿部政治郎	寛政8年 1796
豊岡新田	板野郡松茂村	坂東茂兵衛	享和元年 1801

新田名	明治22年の村名	初期開発者	開発開始年
豊中新田	板野郡松茂村	豊成金兵衛他	享和元年 1801
満穂新田	板野郡松茂村	後藤善右衛門	文化12年 1815
豊久新田	板野郡松茂村	阿部豊吉他	文化14年 1817
小松新田	板野郡川内村	荒井幸次郎	文政年間 1818
金岡新田	板野郡川内村	後藤喜右衛門	天保2年 1831
金沢新田	板野郡川内村他	土成村 日根氏他	安政2年 1855

表-1 江戸時代中期以降に開発された吉野川河口域の新田村落一覧



図一1 板野郡新田開発状況図

【第一期改修竣工平面図(大正15年)に筆者加筆】

2. 京都商人の悲願 きさぎの 笹木野の開拓と三島泉齋 みしませんさい

吉野川デルタに位置する笹木野(松茂町)は、17世紀中頃に京都の豪商、三島泉齋が干拓したのが村の始まりと伝えられています。伝承によれば、三島泉齋が有馬温泉へ湯治に出かけたときに、大松村(現在の徳島市川内町)の富豪、近藤吉兵衛と知り合い笹木野の新田開発を勧められたのがきっかけだといわれています。泉齋は現地を見学したうえで、新田としての将来性が豊かであると確信し、私財を投じて開拓の事業に取りかかりました。

その計画は、笹木野、加賀須野、平石の3村にわたる約390haの広大なかやの菅野を一度に開拓しようというものでしたが、笹木野は吉野川(現在の旧吉野川)と今切川に囲まれ土地が低かったために、洪水や津波の被害をたびたび受け事業は困難を極め、ついに、三島泉齋は失意のうちに没しました。

その後、干拓事業は何人かの商人達に引き継がれ、最後は徳島藩の内外から土地を求めて移り住んだ入植者たちの努力によって、144haの新田村として「笹木野村」が誕生したのです。

川内町平石の若宮神社には三島泉齋を祀り、寛政11年(1799)2月に建立された「三島泉齋宝篋印塔」があり、笹木野春日神社境内には泉齋を祀る新宮社があります。また、泉齋の屋号である「永丸屋」にちなんだ「えいがん堤」は、今も残る遺跡です。「えいがん堤」は平石と米津・富久・富吉の各新田の境界を南北に走る旧堤防で、築堤に用いた土は、徳島城下の佐古山から別宮川を渡って運んだといわれています。また、「えいがん堤」の他にも、「いんがん堀」という新田の利水のために築かれた水路の名も泉齋の屋号にちなんだものであり、当時の堀は残っていませんが、泉齋の功績を物語るモニュメントと言えるでしょう。



文化8年(1811)5月測量
同11年(1814)3月製図
に筆者加筆

徳島藩絵図方の岡崎三蔵
によって作成された測量
図。笹木野村は、旧吉野
川・今切川の流路に沿って
堆積した砂地を干拓した
ため、L字形の村域が形成
されている。

※左図は現在、松茂町歴史
民俗資料館で展示されて
います。詳しくは、下記の
QRコードから松茂町歴史
民俗資料館・人形浄瑠璃芝
居資料館ホームページで
ご確認ください。



図-2 板野郡笹木野村分間絵図
同郡豊仲新田分間絵図
松茂町歴史民俗資料館 提供

図-3 航空写真(平成24年撮影)に
図-2の範囲を重ね合わせた位置図



写真-1 三島泉斎の宝篋印塔
(徳島市川内町若宮神社境内)

この石塔は、「宝篋印塔」と呼ばれる宝塔（内部に経文を収めた塔）の一種。

三島泉斎を顕彰するため、江戸時代中期の寛政 11 年（1799）に建立された。

近年の建て替えにともない、松茂町歴史民俗資料館にその石材の一部が寄贈されている。

参考：松茂町歴史民俗資料館解説シート引用



写真-2 えいがん堤
(徳島市川内町)

3. 新田開発の要は堤防工事にあり 豊岡新田と豊岡荔墩^{とよおかれいとん}

松茂町の豊岡神社境内に豊岡開拓碑があります。碑には豊岡の地が藩政後期の文化元年（1804）に宮島浦の庄屋、坂東茂兵衛^{ばんどうもへえ}によって開拓されたことが刻まれています。

この頃の新田開発の多くは、豊かな財力をもつ大阪や徳島の商人が、藩に開発許可を求めするために献上金を納めて許可を得たのち、他村から移住した人々の労働によって開発が進められていました。当時の北方では藍が一円に栽培され、米不足は深刻でした。そこで藩は、不毛の土地を水田に変えて米作りを補う必要があったのです。そのため、新田開発には5年ないし10年の期間を定めて、この期間は年貢を免除したり、作物の制限を緩めていました。つまり優遇措置による新田奨励策^{しょうれい}がとられていたのです。

坂東茂兵衛は享和元年(1801)、笹木野村・住吉新田と長原浦との間に残った萱野約260haを開拓するとして150両の莫加金^{みよがきん}を上納して許可されました。工事は南側に石垣の堤防を築き、杭木を2列に打ちつらね、捨て石で固めていくというもので、比較的短期間のうちに一応の堤防を完成させたと伝えられています。

しかし、堤防ができたとはいえ、その後の開拓事業は困難でした。海岸に近く、今切川河口に位置するため、毎年の洪水と波浪によって堤防が決壊し、海水の浸水が頻繁に発生していました。このため、20万本の松を植えて、防潮、防風林としました。「松茂」の名はこうした防潮、防風林に由来しています。

さて、天保4年(1833)頃には、当初計画の約260haのうち、22haが田畑となりましたが、残りは、水溜りや萱野、荒地のままでした。その後の豊岡新田の開発に重きをなした人物が、坂東茂兵衛の孫である坂東黙之丞、のちの豊岡荔墩でした。

祖父が開拓した豊岡新田を好み、姓を豊岡と改めたもので荔墩は号なのです。のちに荔墩は、大庄屋となり今切川の治水、利水に功績をあげ、政治家として活躍したほか、明治維新後には「疏鑿迂言」^{そさくうげん}を著して知事に建白するなど学者としても活躍しました。豊岡荔墩と疏鑿迂言については来月号で探訪する予定です。



写真-3 豊岡新田開拓碑
(板野郡松茂町豊岡神社境内)

豊岡神社の境内に建つ「豊岡開拓碑」は、江戸時代後期の文政7年(1824)に建立され、宮島浦(現在の徳島市川内町)の庄屋・坂東茂兵衛が資金を出して、享和元年(1801)3月から約7か月間の突貫工事で新田を完成させた歴史を記している。

しかし、和泉砂岩(いわゆる「撫養石」)で作られているため、風化が早く、すでに明治末期には表面の一部がはがれおちていたようである。

昭和53年9月9日に町指定有形文化財に指定。

参考：町指定文化財ハンドブック3訂版 松茂町文化財めぐり引用

4. 大阪^{こうのいけ}鴻池の商業資本を導入した治水勸農家の功績

住吉新田^{いさわかめさぶろう}と伊澤亀三郎

伊澤亀三郎。寛延3年(1750)生まれで吉野川に架かる瀬詰大橋の北、阿波市伊沢に生家があります。伊澤家は旧伊澤城主の直系で父は組頭庄屋でした。亀三郎の残した足跡は治水・利水の両面にわたり、また、その行動範囲は生まれ育った伊沢から、河口の松茂町、鮎喰川など藩内各地におよんでいました。亀三郎は、藩の勸農方まで出世した徳島藩随一の土木技術者と言われ、藩祖・蜂須賀家政が築いた蓬庵堤^{ほうあんてい}の修築に貢献したことは Our よしのがわ Vol.6 で探訪しましたが、彼はまた、新田開発においてもその名を今に残しています。

亀三郎が、板野郡宮島浦（現在の徳島市川内町）から長原浦（松茂町）にかけての萱原400haの広大な湿地を開発しようとしたのは天明3年(1783)のことでした。開発にあたって、亀三郎は大坂商人、袋屋作次郎^{ふくろやさくしろう}の資力を仰ぎ500両を藩に献上し許可を得ました。

工事は、現在の今切川をはさんで南北に分かれて行われました。北側では長原浦と笹木野村の間の萱野を干拓するために長原浦に大きな堤防をつくりました。また、南側では、宮島浦の北側に新田を開く計画でした。ところが完成したばかりの長原浦の堤防が、翌年の洪水によって跡かたもなくなりました。そのため、袋屋作次郎はこの事業から撤退し、亀三郎は開発資金がなくなり困ったあげく大坂商人、鴻池清助に援助を求めました。今度は笹木野村の北端と南端を石積みの堤防で結び、間に広がる湿地を干拓するもので、天明7年(1787)に笹木野堤防が完成し、干拓された新田は「鴻池新田」と名付けられました。これが、のちの「住吉新田」（鴻池家の祭神であった住吉大社の名前に由来）です。

伊澤亀三郎は文政5年(1822)、小奉行格となり知行に三人扶持(一人扶持は1日玄米5合)支配7石を給されました。士分格になった亀三郎は、居を徳島へ移しましたが、それから3年後の文政8年(1825)年7月、病にかかり伊沢村へ帰りその地で永眠しました。(享年76歳)のちに亀三郎の事業は、その養子の速蔵、孫の文三郎へ受け継がれ、今日でも治水勸農といえは伊澤家三代がすぐに思い起こされるほど、徳島藩の発展に尽くしました。



写真-4 住吉新田開拓碑
(徳島市金沢)

今月号は、新田開発の歩みと主な新田開発として、笹木野村、豊岡新田、住吉新田について探訪しました。藩政期、徳島平野の中下流域では藍作が盛んに行われていましたが、米不足を補うため、新田開発も盛んに行われていたことが理解できたと思います。高速道路の鳴門 JCT から徳島 IC へ走行する際、今切川を越えると加賀須野、大松、平石、米津、富久、富吉などかつての新田開発地域を通過します。開発された新田の多くは、現在、空港、工場、住宅などの敷地となっており、今日の徳島北部の産業、経済発展の礎になったことが感じられます。さて、来月号では吉野川利水列伝その3として、幕末から明治にかけて、吉野川から農業用水を取るという大構想を立てた先覚者である後藤庄助、庄野太郎、豊岡荔墩の利水論について探訪します。